

シニア・ストラテジスト
山本 雅文

マネックス証券株式会社
www.monex.co.jp

黒田発言のボディブロー

<ポイント>

- ◆昨日は、米 FOMC で FF 金利予測や GDP 予測が下方修正されたことから、年内に利上げが開始されるとの見方は変わらないものの将来の利上げペースがより緩慢なものになるとの見方が強まり、米 2 年債利回りの低下と共にドルが総じて下落した。
- ◆ドル/円は、欧州時間から FOMC を控えて米中長期債利回りが上昇したことから FOMC 前に一時 124.45 円の高値を付けたが、その後の FOMC のハト派化を受けて 123.21 円へ大幅反落し、結局東京時間の水準に逆戻りした。
- ◆ポンドは、英 4 月週間平均賃金が増加率 +2.7% と上方修正された前月および市場予想を上回ったことから上昇、更に FOMC 後のドル安を受けて、対ドルで 1.2% の上昇、対円でも 193 円から一時 195 円乗せへ上昇した。
- ◆本日はスイス中銀金融政策決定、英小売売上高、ECB による資金供給オペ(テルトロ)、ユーロ圏財務相会合および米コア CPI が予定されている。
- ◆ドル/円は「黒田シーリング」である 124 円台半ばを上抜けできず上値の重さが意識されやすい中で、米コア CPI が市場予想を下回ると 123 円割れを窺う展開となりそうだ。
- ◆ユーロはギリシャ支援問題を巡る財務相会合で進展がないとユーロ安要因だが、来週への先送りはサプライズではなく反応は限定的かもしれない。

昨日までの世界:FOMC は想定通り、小幅ハト派化

ドル/円は、欧州時間から FOMC を控えてタカ派的な内容を警戒してか、米中長期債利回りが上昇したことから FOMC 前に一時 124.45 円の高値を付け、6 月 10 日の黒田総裁発言前の水準をほぼ回復した。もっとも、その後の米 FOMC で、FF 金利予測や GDP 予測が下方修正されたことから、年内に利上げが開始されるとの見方は変わらないものの将来の利上げペースがより緩慢なものになるとの見方が強まり、米 2 年債利回りの低下とドルが全面安となった。ドル/円も 123.21 円へ大幅反落し、結局東京時間の水準に逆戻りした。

ユーロ/ドルもギリシャ支援協議への懸念は燻るものの、米 FOMC を控えて欧州時間までは概ね 1.12 ドル台後半で推移した後、FOMC の小幅ハト派化を受けたドル安により、一時 1.1358 ドルへ上昇した。もっとも、6 月 10 日の直近高値である 1.1386 ドルには届かず、6 月半ば以降、1.12~1.14 ドルのレンジ感が強まっている。

ユーロ/円は、欧州時間のドル/円上昇につれて 138 円台後半からじり高となり、FOMC の影響はあまり受けずに 140.01 円へ上昇した。FOMC 後のドル安局面では、円とユーロがほぼ同程度上昇したよう

だ。

豪ドル/米ドルも、欧州時間の対円での米ドル高基調につれて0.77ドル台半ばからじり安となり、FOMC前に一時0.7646ドルの安値を付けた。もっとも、その後のFOMCの小幅ハト派化を受けて一時0.7770ドルへ急反発し、ほぼ元の水準に戻ったかたちとなった。

豪ドル/円は、欧州時間は鉄鉱石価格の反落基調もあってか豪ドル安基調となり、95円台半ばから95.04円へ軟化した。FOMC後に米ドル安局面では円よりも豪ドルの方が大きく反発したことから、95円台半ばを回復した。

ポンドは、英4月週間平均賃金(振れが大きい賞与を除いた分)が前年比+2.7%と上方修正された前月(+2.2%→+2.3%)および市場予想(+2.5%)を上回ったことから、上昇、更にFOMC後のドル安を受けて、対ドルで1.56ドル台半ばから一時1.5847ドルへ1.2%上昇し5月半ばの直近高値を上回った。対円でも193円丁度近辺から一時195.63円へ大幅に上昇した。

きょうの高慢な偏見: 黒田発言のボディブロー

[今週の見通しはこちら\(6月12日付FX戦略ウィークリー\)](#)

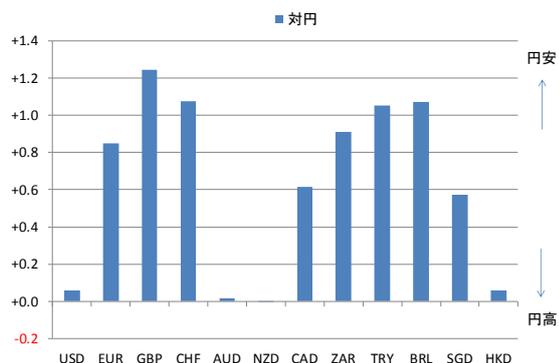
[今週の経済指標カレンダーはこちら](#)

ドル/円は、6月10日の黒田総裁発言前の水準である124円台半ばを上抜けできずに反落したことから、当面上値の重さが意識されそうだ。材料面では米コアCPIが重要で、前年比+1.8%と前月からの変わらずの予想だが、既に発表されたコアPPIは前年比+0.6%と前月および市場予想を下回り鈍化基調であることや、前月のコアPCEデフレーターも+1.2%へ低下していたことなどから、下振れリスクに注意が必要で、123円丁度を窺う展開となりそうだ。

ユーロ/ドルは、ECB テルトロとユーロ圏財務相会合が注目され、特にギリシャ支援問題では6月末の期限が迫っていることから、今回何らかの進展がないと、ギリシャだけでなくスペインやイタリアの国債へ売り圧力が再び波及するリスクがあり、ユーロ安バイアスがある。但し、来週まで持ち越される可能性についても認識が広がってきているとみられ、物別れでもサプライズではなさそうで、目先のユーロ下落は限定的となりそうだ。テルトロは結果の解釈が難しく、低めの市場予想である500億ユーロの供給額を上回ると、ECBのバランスシートが予想よりも拡大する点ではユーロ売りだが、これを元手に銀行貸出が増加し景気下支えに繋がるのはユーロ買い要因だ。因みに過去3回(昨年9月、12月および今年3月)の供給額は各々826億ユーロ、1298億ユーロ、978億ユーロだった。

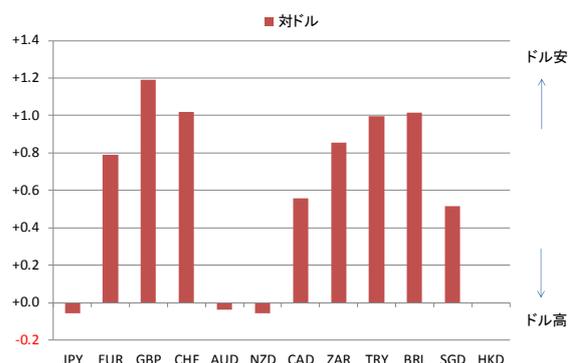
豪ドル/米ドルは特段の追加材料はなさそうだが、鉄鉱石価格の反落傾向が上値抑制要因となる一方、RBAの利下げ期待の後退が下支え要因となっており、0.77ドル台でもみ合いの展開となりそうだ。

主要通貨の対円相場(前日比%)



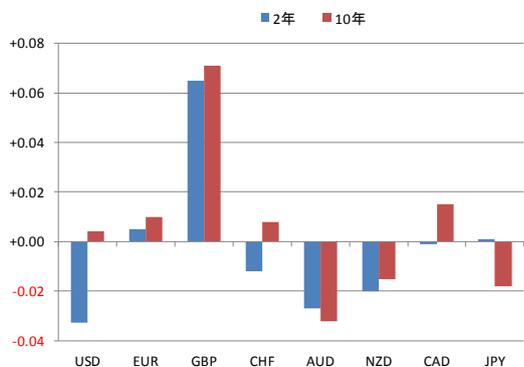
(出所) Thomson Reutersのデータを基にマネックス証券作成

主要通貨の対ドル相場(前日比%)



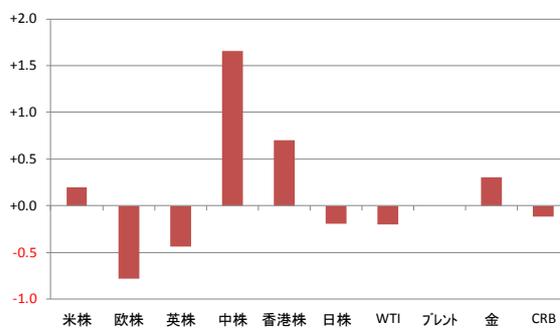
(出所) Thomson Reutersのデータを基にマネックス証券作成

主要国の中長期債利回り(前日差%ポイント)



(出所) Thomson Reutersのデータを基にマネックス証券作成

主要株価・商品価格(前日比%)



(出所) Thomson Reutersのデータを基にマネックス証券作成

利益相反に関する開示事項

マネックス証券株式会社は、契約に基づき、オリジナルレポートの提供を継続的に行うことに対する対価を契約先証券会社より包括的に得ておりますが、本レポートに対して個別に対価を得ているものではありません。レポート対象企業の選定はマネックス証券が独自の判断に基づき行っているものであり、契約先証券会社を含む第三者からの指定は一切受けておりません。レポート執筆者、並びにマネックス証券と本レポートの対象会社との間には、利益相反の関係はありません。

- ・当社は、本レポートの内容につき、その正確性や完全性について意見を表明し、また保証するものではありません。
- ・記載した情報、予想および判断は有価証券の購入、売却、デリバティブ取引、その他の取引を推奨し、勧誘するものではありません。
- ・過去の実績や予想・意見は、将来の結果を保証するものではありません。
- ・提供する情報等は作成時現在のものであり、今後予告なしに変更又は削除されることがございます。
- ・当社は本レポートの内容に依拠してお客様が取った行動の結果に対し責任を負うものではありません。
- ・投資にかかる最終決定は、お客様ご自身の判断と責任でなさるようお願いいたします。
- ・本レポートの内容に関する一切の権利は当社にありますので、当社の事前の書面による了解なしに転用・複製・配布することはできません。

マネックス証券株式会社 金融商品取引業者 関東財務局長(金商)第165号
加入協会: 日本証券業協会、一般社団法人 金融先物取引業協会、一般社団法人日本投資顧問業協会